

諸世雑記に見る白石の熊の害

開拓者が最も恐れたのはヒグマだった。体型が大きく凶暴で雑食であることから、人や家畜はもとより農作物に及ぼす被害が非常に大きかった。明治10年に開拓使は熊・オオカミ1頭につき2円の捕獲奨励金を出して駆除に努めた。米60[㍊]が2円50銭の頃だった。それでもこれらの猛獣に立ち向かう恐怖からか、実効があがらず、翌11年には熊5円、オオカミ7円に値上げしている。

白石村の熊の被害について、明治42年に開拓二世の榊原直行翁が書き残した「諸世雑記」に記されているので紹介してみたい。

明治5年、99番地（現在の平和通12丁目南・東白石会館付近）裏の湿地に穴ごもりから出た熊を佐々木直則、渋谷永貞の二人で射止めた。この熊は2[㍊]近い大熊だった。

明治8年7月7日朝、上白石との境の沼（現在の東高校付近）に母子グマが現れ、榊原直温、佐々木直則の2人で2頭とも殺し、20円の賞金を得た。

最悪のヒグマ事故

明治11年、かねてから軽川（今の手稲）に出没していたヒグマが馬を食い殺したとの申し出があり、さらに11月17日には円山村で炭焼小屋の屋根を壊したので、開拓使は猟師を集めて駆除することにした。白石から佐々木直則、武田義勝、榊原熊太郎の3人が参加して追跡を始めた。



北海道大学付属植物園博物館のヒグマの剥製。白石の熊同様に各地で人を殺して仕留められた

足跡を追い、藻岩山の中腹を経て豊平川を渡り、真駒内さらに月寒坂下の林まで追ったところで夜になり追跡を中止した。翌18日にはヒグマは白石村を通過し、夜に丘珠村に現れて暴れているため、再度佐々木直則、渋谷永貞、武田守約が出向いた。

12月5日の夜になって農家を襲い、主人と赤ん坊、下男を食い殺し、妻に重傷を負わせた。北海道の熊害史に残る有名な話である。琴似の屯田兵までが出動して射殺した。

北海道大学附属植物園の博物館に展示されているヒグマは、明治11年12月5日夜、丘珠村で炭焼小屋を襲い、3人を殺し、1人に重傷を負わせた人食い熊である。

明治13年10月13日朝、坂の上墓地（白石中央墓地）脇へ白石村民5人が熊討ちに出かけ、2人が先に子熊を討ったところ、母熊が暴れ出した。ある者は木に登り、ある者は筐の中に伏して難を避けたが、1人が逃げそこない、目の下から半面を取られ、そのうえ両足を踏まれ、首を食われて死亡した。午前10時頃、母熊を追いかけた岩淵が帰らないため捜しに行ったところ、血の臭いはするが見あたらず、そこへ安斉真睦、岡田庸理、武田清寧らが来、一同でようやく討ち取ることができた。

明治14年8月6日、93番地 渋谷永

貞宅の裏（今の南郷通10丁目南 旭町公園付近）に子連れ熊がいるのを見つけ、榊原直行、佐々木直則、渋谷永貞の3人で足跡をたどっていたところ、佐々木に熊が飛びかかったので、火縄銃を構えると、熊も驚いて筐の中に逃げ込み、カサとも音を立てずに逃げ去った。翌7日、村中総出で探したが見つからなかった。

東白石会館近くのヒグマ事故

かねて、80番地から92番地（現在の本通8丁目～10丁目北）裏の笹藪に居着き、トウモロコシを荒らす熊がいた。

明治29年9月2日、月寒道路（現在の水源池通）で佐々木直一がこの熊に出会い、討ち取ろうとしたが逆に頭・首にけがをして取り逃がしてしまった。直ちに入院させたが、翌日死亡した。

当日、99番地（現在の東白石会館付近）で村田守約が熊と格闘して入院した。村では札幌警察署の応援を求めるほか、アイヌの熊撃ち2人を雇い、村中総出で熊狩りをした。しかし工藤喜之助が目の下から顔面半分、鼻半分を欠く傷を負い入院した。翌4日に村中総出で空砲を撃ち、熊を追い出し、立ち上がったところを撃ち取った。

（武田清晃）

